

ORIENTAL STUDIES TRIPOS Part II

Japanese Studies

---

Tuesday 3 June 2008      13.30 – 16.30

---

**J.12 JAPANESE TEXTS, 1**

*Candidates should answer **both** questions in Section A and **one** question from Section B.*

*Write your **number** **not** your name on the cover sheet of **each** Section booklet.*

**STATIONERY REQUIREMENTS**

*20 Page Answer Book x 1*

*Rough Work Pad*

**You may not start to read the questions  
printed on the subsequent pages of this  
question paper until instructed that you may  
do so by the Invigilator.**

## SECTION A

Candidates should answer BOTH questions:

## 1 Translate into English: [35 marks]

A young man relates an argument he had with his father to a third party

「衝突の仕方を知らないふたりが、初めて真正面からぶつかったわけでしょう。どっちも加減を知らないんですよ。とことんいっちゃう。父も僕にひどいこと言いましたが、僕も輪をかけて父にひどいことを言いました。父子でなかつたら、二度と和解できないような罵倒の仕方をしちゃったんです」

親父に裏切られたような気もした、という。

「バカもん、大学行くなら東大だ、東大がいちばんだ、東洋工大なんざクズだ——そんな価値観を、まさか親父が持っているとは思ってなかつたんです。前に、子供の頃から僕は親父を尊敬していたって言いましたよね？ それはお世辞じゃなしにそうだった腕一本で働いて、僕らと祖母の暮らしを支えてくれたわけだから。だけど、その父が僕に、有名大学へ行け、行かないヤツはアホだみたいな言い方をするってことは、裏返せば、父自身が自分の人生に何の価値も認めてないってことになるじゃないですか。学歴もない教育もない、ただの運転手なんだからってね」

何よりも、それに驚いた。がっかりした。

「じゃあ父さんの人生はなんだったんだよ、父さんの誇りはないのかよって、僕が詰め寄ると、俺の話をしてるんじゃないかねえ、おまえの話をしてるんだって、また怒鳴る。僕にはそれ、親父が僕から逃げていこうにしか感じられないわけです」

キヌ江がおろおろして宥めに入ろうとすると、直澄は彼女のことも怒鳴りつけたそうだ。

「今考えれば、父も僕とぶつかったというところで、すっかり動転してたんでしょね。あれよあれよという間に売り言葉に買い言葉でどんどんエスカレートしちゃって、ついつい心にもないことを口に出していたということだったんでしょ。だけど、その場の僕にはそれが判らなかつた」

無理もないことであると、第三者には簡単に言うことができるが。

「俺がどんなに苦勞しておまえを育ててきたのか、おまえ判ってんのかと、こう来るわけです。いい大学へ行っているいい会社に勤めて、俺を喜ばせてやろうとおまえ思わないのか。俺が自慢できるような人間になろうとは思わないのか。なんて情けない、冷たいヤツなんだおまえは、と」

加減 measure; control

罵倒 verbal abuse

お世辞 flattery

アホ = バカ

責め寄る attack, press hard

キヌ江 (「僕」の母)

宥めに as peacemaker

直澄 Naozumi (name)

動転する be stunned, surprised

判る = 分かる

2 Translate into English: [35 marks]

婦りがけに研究所の技師の人が私にこの会をどう思ったかときくので私は「日本での問題のとりあげ方とフランスでの取上げ方で一つの大きなちがいを感じた。それは日本で女性科学者の問題が検討される時は一般に男性に対しての闘争的なものになるのにこの研究会ではむしろ男性も女性に協同して、一緒に今までの悪条件を改良しようとしている事で闘争の相手はむしろ政府の施政に対してである事で、私がかねて日本の女性科学者の運動で全面的に賛成出来なかった理由が一つつかめたような気がする」と述べた。私がかねて、男性と女性の関係は何れにしても両方が人間生存上必要不可欠なものなので資本家対労働者の闘争のように相手がなくなってもよいものとはちがう事、但し社会問題として、未発達な国ではどうしても男性が闘争の相手になるにしても、それは男性としてではなく、社会的に男性が占めている地位に於ての非文明さに対するものだという事が紙一重のちがいのようで大きな労働問題としての相違なのだと思っただけで日本の問題のとり上げ方に全面的に賛成しかねているのがここにあったという感じがするのであった。この点で、私は研究者を養成する水準での女子大学の存在も実はあまり賛成でなく、それは発展途上の過渡的段階のものと思うのである。もう一つ、これは最近私がフランスにおいてのある招宴で経験した、いわゆる日本では何れも相当文化的水準の高い筈の大学関係及び文部省関係の人達に私が当然賛成を得るものとして話題とした事に対して全面的反対を受けた事を思い出したのである。それはある日本の週刊誌を偶然みた折に日本の大学生の卒業生の謝恩パーティに女子学生が振袖姿もあでやかに写っている写真について私が「大学の卒業のよろこびという事をああいふ形であらわす精神的な低さにかっかりする」と言った事に対しての反対である。「どうして女性が美しく飾っていけないのか」「親達がこうして娘の前途を祝ってやるのが悪いのか」等々の反対意見に私は啞然としてしまった。

施政 administration; policies

紙一重のちがい only a shade of difference

過度的 transitional

招宴 formal dinner

筈はず

振り袖姿 formal kimono

前途 future prospects

啞然とする flabbergasted

Yuasa Toshiko, 'Josei to kagaku' in *Zoku Pari zuisō* (1980), pp. 158-59

(TURN OVER)

